

令和4年度 第2回練馬区放課後子ども総合プラン運営委員会 会議要録

- 1 日時 令和4年12月15日（木）午後6時30分～午後8時10分
- 2 場所 本庁舎7階 防災センター
- 3 議事および意見・質疑ならびに回答要旨

(1) 前回議事「子どもたちに楽しい思い出を残すためにできること」の事例報告

- 練馬区事例報告（児童館・学童クラブおよびねりっこクラブ・応援団まつり）
（児童館）

縁日等のイベント、中高生のクッキング事業を再開。年明けから、乳幼児親子の昼食場所提供も再開見込み。

（学童クラブおよびねりっこクラブ）

縁日イベントでは、一般区民は入れず内部の児童のみに参加者を絞り、お客さんとお店屋さんの交代制にして実施。

（応援団まつり）

昨年度まで、開催した校数は1割台だったが、今年度はすでに開催済みが5割。開催予定を入れると6割の学校で応援団まつりが再開。飲食は伴わない学校が多数。

- 委員事例報告

（育成委員）

川柳を実施。心の中がみえて面白い。川柳をアレンジしたカードゲームを考案中。

（民間学童保育）

父母会が結成され、保護者主催の運動会とお金の使い方や運用を勉強できる師走祭を開催。子どもと関わりたい保護者がたくさんいることを実感。

（学校応援団）

学年を2つにわけて花火大会を実施。準備、設営は在校生保護者に限定。子どもたちの歓声をエネルギーに、保護者の方が盛り上がりコミュニケーションを取っていた。近隣から苦情があったが、やめるのではなく来年以降は苦情がこないよう事前の根回し方法を要検討。

(2) 「子どもたちのために地域の大人が連携・協力していくには」

- 委員事例紹介、意見要旨

ア PTAに関して、やってみないとわからない、という第一歩まで持っていくのは大変。地域イベントの際は、慣例の役割を決めつけるのではなく時代に合わせてお互い話し合うなど、事前の相談の機会があるといいのではないかと。

イ ねりっこクラブ化して定員が90名になったことと、コロナで分断されたことにより、親同士や先生とのつながりが持ちにくくなっている。以前の小規模の人数の学童クラブの方が、先生の苦労も少なくて良いのではないかと。

ウ コロナの制限の中で生活しているので、運動量の面からも子どもたちにたくさん遊ばせてあげたいと思うと、放課後の居場所は大切である。人数が多ければトラ

- ブルも増えるので、学校だけでなく放課後でも、心の教育もしっかりしてほしい。
- エ 地区祭を開催。出席は校長と副校長のみだった。一般の先生に授業外で子どもと触れ合い、地域住民とも触れ合うきっかけにしてもらいたく、残念であった。全体観を持って地域組織を考えてもらいたい。
- オ 多様な価値観がある中で、どのように集団としての力を高めて価値観を統一していくのが課題。価値観の違いから、少し体調が悪くても参加させてしまうということがあります。コロナの校内感染が拡大したこともあり、苦労している。
- カ 学校評議員会が行われるようになり、先生方は大変な思いをしていると聞く。保護者の価値観も多様になり、家庭で学習面を見られず授業についていけない子どもは地域未来塾でフォローをしている。
自分の子どもが小学校を卒業しても育成委員をしている人は、ボランティア精神で地域の子どものを思っている。現役保護者もこの時期を少し上手に子どもたちに使って自主的にPTA等に参加してもらいたい。
- キ ねりっこクラブや学校応援団の存在意義は大きいと思うが、行政として今後の推進計画は？
- ク 保護者が多様化しているが、考える余裕のない保護者もいる。高学年でも学童クラブを利用したいし、ひろばだけでは不十分。学童クラブはセーフティーネットの役割があるので、少しでも多くの子どもと親を救えるよう区として整備してほしい。子どもが40名とその保護者だったらもう少し落ち着いて向き合うことができ、きめ細かく把握することができる。なるべく直営で残してほしいが、委託するならば責任を持って事業者を決めてほしい。
- ケ 学校応援団は学校内で一番長くいる人が所属しているところ。学校に関わるすべての大人たちをつなぐ橋渡し役として、子どもたちに良い影響が出るように連携、協力している。
- コ ねりっこ化と同時に父母会を解散した。理由は、コロナによるイベントの減少と、規模が大きくなると組織化するのが難しく、負担が大きいこと。保護者の中には、預かってくれればそれだけで有難いと思っている人も多く、学童クラブへの思いも二極化している。地域子ども・子育て支援事業の一部で学童クラブが定義されているとすれば、学童クラブだけではない広い論議をして子育て支援の事業を見直さないといけないのでは。
- サ PTAの形として、自主的に関わりたい保護者と、民間委託の手を借りる形態も今の時代に合っているのではないか。子どもは楽しいか楽しくないかで動くので、地域との関わり方も単純に考えてもいいのでは。
- シ 個人面談やにこにこ事業を利用する母親たちは、すぐくつながりを求めていると感じる。
区立学童クラブではなく民間学童保育なので自由が利き、民間だからこそできることがある。
- ス PTA会長や代表は孤立しがち。会長同士の交流、親睦、連携のためイベントを実施。会長同士のつながりを各学校へ持ち帰り、地区の応援団や育成委員会につなげていきたい。

□ 委員意見要旨（エについて）

ア 学校現場はすごく忙しいので、校長と副校長が来てくれるだけでもすごいこと。

イ 校長と副校長が現場の先生を守ったのでは。

□ 練馬区回答要旨（キについて）

学童クラブのニーズが多い中で、ねりっこクラブの実施により学童クラブの受け入れ枠を拡大していく方向で進めている。

様々な事業形態の中で、地域、学校、学童クラブやひろば職員、子どもたちでどのように関わりをつくっていくのか検討を続けることが、放課後事業の中で一番力を入れるべきことと考えている。それぞれの放課後事業での経験や地域の工夫を横断的に共有して活かせるよう研修等で交流の機会を設けている。

□ 委員意見要旨（クについて）

ア （学校応援団兼ひろば職員）

ねりっこ化すると学童クラブとひろばの責任者が同じになり、ひろばスタッフも事業者の雇用になる。ねりっこ化により、学童クラブとひろばがより密になり、ひろば職員も学童クラブの児童を見られるようになった。学童クラブの児童を学童クラブの先生だけで見なくても良い形があり、できることがある。

イ （民間学童保育）

支援の単位1につき職員2名という都の基準がある。子どもの人数が多くなったときに、子どもに対する思いが変わるのではなく関わり方が変わってくる。心配することではないと思う。

ウ （学童クラブ保護者）

大人数になると、保育が薄くなるという意見は保護者の中からも出てきている。

□ 練馬区補足要旨（クについて、およびクに関する委員意見を踏まえて）

練馬区の職員配置基準は都の基準より厳しく、支援の単位1につき、有資格の職員2名＋補助員1名としている。支援の単位ごとに担任制をとっている。

セーフティーネットとして、福祉的課題を発見した際は、学童クラブのみで解決するのではなく、行政の内部と連携し子どもを守るように進めている。

今後は児童館機能を充実させ、そこにねりっこクラブも連動していき、子どもたちと一緒に見ていく地域をつくろうと進めている。

(3) 報告

・子ども・子育て支援事業計画の中間見直しの資料説明、パブリックコメントの案内

4 連絡事項

次回開催は令和5年3月の予定。